

# 国宝・大崎八幡神社拝殿板壁彩色の保存処置

(受託研究報告 46号)

中 里 寿 克 ・ 樋 口 清 治

## 1. はじめに

大崎八幡神社は、伊達政宗によって慶長9年より4ヶ年を費して建立されたと云われるが、拝殿勾欄擬宝珠には慶長14年の銘があり、完成したのはその頃と見做されている。

建物は権現造りで、本殿、石の間、拝殿よりなる。全体は内外とも漆塗りとし、一部組物部分等には彩色が施こされる。

外面の彩色は、今日まで度々の修理を受け、当初の部分は残っていない。内部の彩色も当初のものではなく、少なくとも過去1度大々的な修理があり、塗直しが行なわれた痕跡がある。すなわち、四代藩主綱村公の寛文8年(=1669)、又は六代藩主宗村公の享保年代(=1716)に大規模な修理が行なわれたので、そのあたりで改装された可能性がある。

本殿内部は正面見付けが黒漆塗りで、長押、斗拱部分に彩色を施す。

石の間は天井や支輪に百薬草図が描れるが、支輪は紙の貼付絵である(図一6・7)。東西の枇杷板には漆地の上に金箔押しとし、草花文が描かれる。

拝殿は長押、斗拱、天井に彩色があり、東西面と、石の間に接する將軍の間には板壁があって、黄土地にぼたん唐獅子図、波濤図が描かれる。(図一8)

## 2. 保存処置における過去の経過

大崎八幡神社の彩色剝落止めは過去2回行なわれている。

第一回 昭和31年8月より

本殿正面、石の間、拝殿の天井、組物、板壁等、彩色部分のすべてにわたって行なわれた。合成樹脂は低濃度のPVAを用い、処置後アクリル溶液の噴霧を行っている。この処置に関する記録はまったく残っていない。

第二回 昭和42年9月より

丁度10年を経て、再び剝落止めを行行事になった。石の間、拝殿の天井を除いて、再度内部彩色の全面を処置した。使用した合成樹脂はアクリルエマルジョンにPVAを混合したもので、剝落部分に塗りつけ、樹脂が浸透するのを見計らって濾紙をあてて押つける方法をとった。

この時点での彩色の状態は、かなり危険な状態にまで進んでおり、31年当時の原時点まで戻ってしまったと考えてもよい所が一部にあった。すなわち、拝殿の板壁でみると、画面ではかなりの部分の彩色層がすでに剝落していたが、なお剝離部分が全面にあり、最も危険な部分は山形状に剝離する所で、彩色層が硬いため、秋材上又は春材上で押出されていた。

拝殿の斗拱の彩色は比較的健全で一部でのみ剝離がみられたにすぎないが、石の間の支輪の貼付絵は、かなりの部分で再び浮上っていた。

結果的にみて31年に行った処置は所期の目的を達しなかった事になるが、ここで剝離していた個所が、はたして接着された部分なのか、新たに剝離した部分なのかははっきりしない。特に西面に剝離がひどいことは、西日によって板の伸縮がはげしいとの予測も出来、又樗の板目

であるため、外気の影響を受けやすい事も考えられた。

第一回、第二回の処置を振返ってみると、第一回目場合は、おそらく PVA の濃度があまりに薄くて彩色層のみを強化させるにとどまったためと、接着面に充分行き渡らなかったためと思われる。第一回の処置によって彩色層はかなり硬化され、弾力を失って接着しにくいものとなった。

第二回目の場合も結果的には第一回目の処置と同様の事をくり返したにすぎないために再び剝離する事になった。アクリルエマルションが確実に局面に充填した場合は所定の強度が得られるが、表面からの浸透を期待した処置法では、強化されている彩色層を接着する事は困難である。一たん接着した部分も再度彩色層自体を強化する事となり、僅かの板の伸縮によっても剝離してしまふ結果になったのだと思われる。二回の処置によって組物部分の彩色層も安定したかに思われたが、剝離がかなり進行している部分もある。

### 3. 板壁の現状

板壁は西側と東側にそれぞれ3面づつあり、石の間との堺にも2面づつあって、計10面を数える。

板材は櫟の板目材で、横に5枚ほど重ねて壁体をつくるが、矧目には特に布着せはしていない。ただ矧目の一部と板面の一部に調整のため木屎を填めた所も見られた。

彩色法はそれほど複雑でない。すなわち、素地上に全面に胡粉を塗り、その上に絵の部分は大雑端に除いて黄土を塗る。絵は唐獅子の部分は体軀を緑青塗りと群青塗りとわけ、胡粉地の上にぼかし塗りにし、たてがみ、尾等の部分は岱赭を塗って淡墨でぼかし、濃淡の墨線でくくる。一部金泥線も入れる。

ぼたんは赤色と白色があり、朱と胡粉であろう。波濤は胡粉地に群青をぼかし、岩礁も緑青で塗りとする。

輪郭線は大方は塗りとして残すが、一部賦彩後に焦墨で強くしめくくっている。

絵の一部は黄土の上にもものっており、黄土塗りは、絵の大まかな下図の段階で塗られたものであろう。

これらの彩色の剝落部分を詳細に観察すると、現在ある彩色の木地上に、現在の絵と関係のない墨線や緑青が所々付着しており、組物等の彩色と同様、この板絵も又改作された可能性が強い。

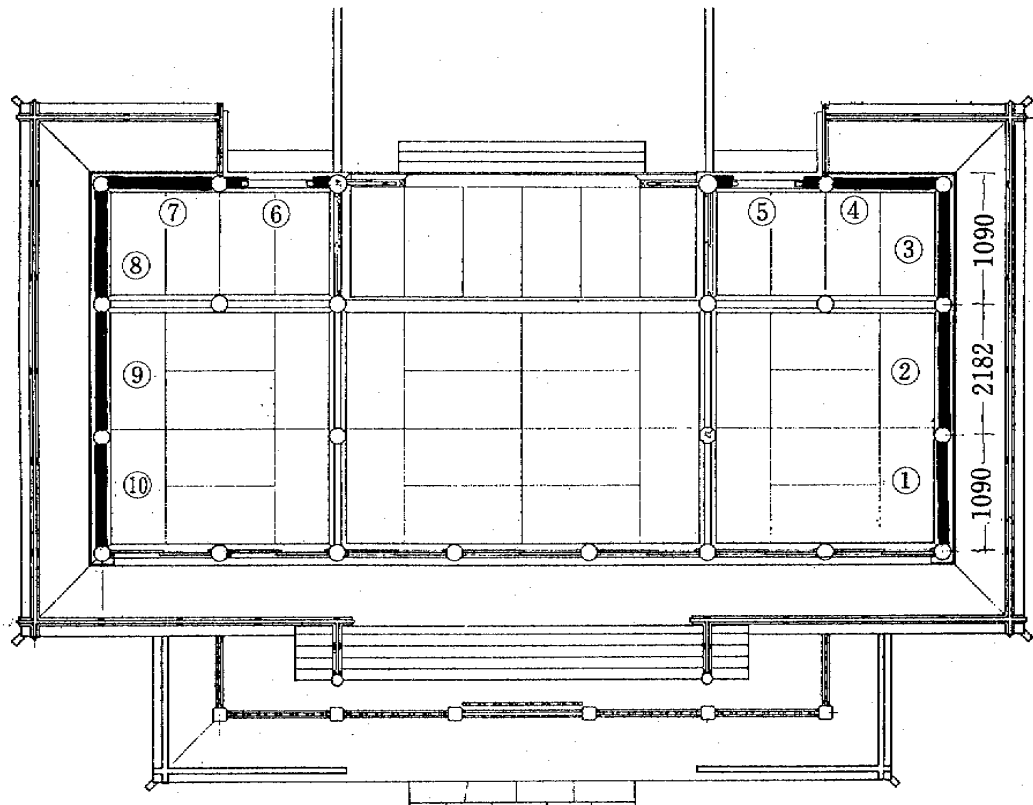
画面背景を黄土に塗るのは特異な感じをいだが、おそらく金箔の感じを出す意図があったのではなかろうか。

### 4. 板壁彩色の破損現状

最も重要と思われる唐獅子図は西面(9)(10)にひどい剝落がみられるが、東面では比較的保存よく、南の一面(1)は特に剝落が少なく、図柄が鮮明である。

西側の二面(9)(10)の剝落の状態は絵の部分、黄土地の部分に関係なく全体に生じており、画面の下部は特にひどく剝落し、(10)はほとんど木地を露出している。画面全体でみても剝落は進行してきており、唐獅子図と辛じてわかる程度までに木地が露出している。(7)(8)もほぼ同様の状態だが、(7)の上方には辨柄色の補筆が目立つ。過去、それを塗った時点では、その程度の剝落であったのだろう。現在はその時点から、遙かに進展してしまっている。

東面(1)(2)では、やはり下部に剝落が集中し、木地を露出するが、(2)は黄土地部分がやや健全で、絵の部分に剝落が多い。(3)(4)も下部で木地を露出するが、(4)には黄土地部分に油状のもの



図一 大崎八幡神社拝殿平面図（太線板壁）

が浸み込んで、褐色に汚染されるが、剝落剝離がない。

左右の花頭窓の部分(5)(6)は、波濤図の続きが画かれるが、ほとんど剝落している。10面を全体的にみると、黄土地の部分は胡粉と一体となって木地から浮上がり、一部には黄土層のみ磨滅する様に剝落する個所がみられ、又(4)の汚染部分の近くでは、水によると思われる黄土のにじみがみられる（図一）。

昭和53年度現在でみられる彩色層の剝離の様子は、昭和42年度にみられた剝離状態とほとんど同じと考えてよく、島状に残存する所や、外縁部は、大方軽く浮上っている。ここでの典型的様相は、先述の如く、主に木目上で長く山形に折れて浮上るもので、黄土地の部分には一部、山形にならずに、半円形に浮上る所もある。

これらの彩色の状態を、なおよく観察すると、剝落状態には二つの顕著な現象が注目される。

一つは木目上の剝離で、これには二通りあって、秋材部上で剝離する部分と、逆に春材部上で剝離する部分が存在する事である。これらは同じ板上で隣りあって生じており、どの様なメカニズムが働くのか興味ある問題である。（図一9）

二つ目は特に西側の板に強く現われるのだが、板の中心部に剝落がひどく、両辺部に残存することが多い事である。中心部は板目が複雑になり、板の収縮が激しいためであろうか。

前述の如く、剝落止めは過去2回行なわれたが、昭和53年度の処置にあたって観察したかぎりでは、42年度の剝落止めの効果は満足な結果と言えない。約10年を経て、彩色層は再び剝離を生じ、10年前に剝落止めを行なわなければならなかった様な危険な状態に戻ってしまった事になる。

この様に過去2回にわたって剝離をくりかえした原因については、先にも述べた様に昭和42年度の処置が十分でなかったか、あるいは接着力以上の応力が彩色層にかかったか、いくつか

の原因が考えられる。

42年度の処置は、アクリルエマルジョンを表面から塗り、彩色層局面に浸透するのを見計らって濾紙で押えている。当時としては最善の方法といえるが、浸透が充分でないと接着面に樹脂が行き渡らず、彩色層のみを強化してしまふ結果となる。改めて42年度処置前の状態と53年度処置前の状態を細部で検討してみると、42年に浮上っていた部分は、53年に再び浮上っている所が僅かにみられ、42年に健全な部分が、53年には浮上り、ひどい所は剝落してしまった所も、当然僅かに認められる。

こうしてみると、42年度の処置で接着されなかった部分は、浮上っているが、樹脂が接着面に行き渡った部分は接着し保存されたのであり、浮上る危険のある部分の予防的効果は、この場合アクリルエマルジョンでは、まったく期待出来なかった事になる。42年度の処置によって、彩色層のみが更に強化されて硬くなり、僅かの木の収縮が大きく影響して、木目上の剝離を更に増長させたきらいがある。

### 5. 合成樹脂の選定及びその使用目的

過去2回の処置によって、彩色層はかなり硬化し、軟らかさを失っているので、今回の処置に対する必要な条件は、接着剤を確実に接着面に充填させる事と、強化した彩色層に対応する濃度の高い接着剤であろうと考えられた。このため、前者の条件を満すためには約10cmの長針の注射器を用意し、後者には漆膜などを接着するのに適している揺変エマルジョンを試用する事にした。揺変エマルジョンは高粘度のため拡散しないので、場所によっては充填不可能な部分も考えられ、パラロイド B72 のトルエン溶液も用意した。

### 6. 保存処置

長針注射器で揺変エマルジョンを注入した部分は、やや大きめに浮上っている部分だが、針を差し込むと彩色層は素地から簡単に剝離する所が随所にあり、その不安定な状態に驚かされた。又長針を差し込んでみても彩色層はほとんど破損せず、改めて彩色層の硬化の状態を認識させられた。(図-10)

木目上の山形の剝離部分は、局部が小さいので、パラロイド B72 を注入した所が多い。

揺変エマルジョン及びパラロイド B72 は光沢の心配が大きく、現に一部では更に光沢を強調させた所もあったが、その除去については特に配慮していない。

今回の処置の主な部分は、予め書き込み用の部分写真を用意し、細部にわたる処置箇所を出来るだけ記録した。処置後の彩色面がどの様な変化を示すかの基本的データとなるものである。

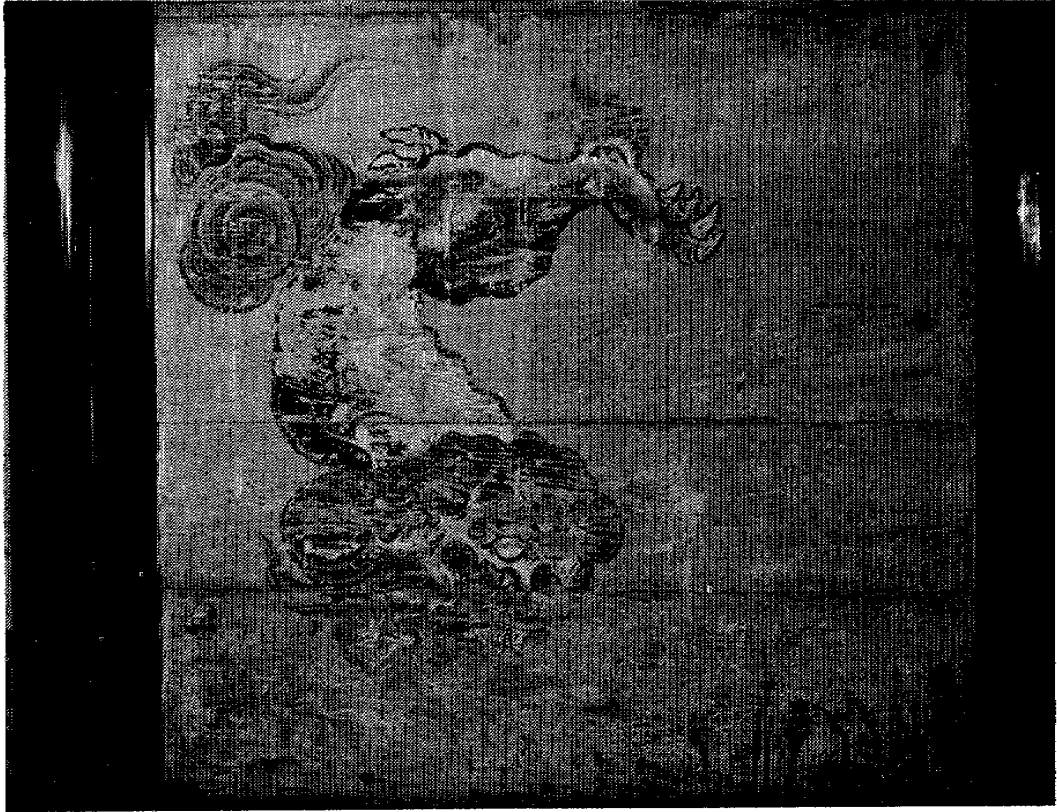
### 7. あとがき

彩色保存処置は、いろいろの場合があってそれに応じた理論と処置法が考え出されるのだが、最も難しいのは、今回の様な再処置の場合である。

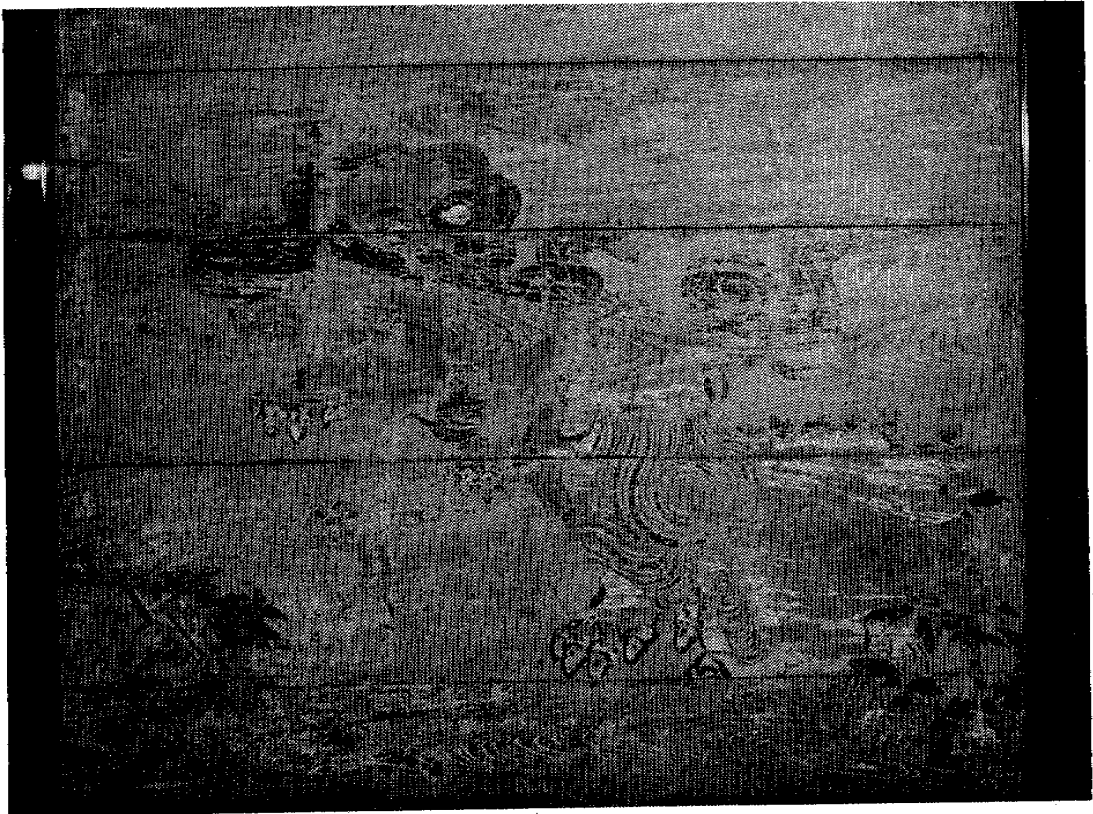
初めて行う処置は、その処置法が理論的に正しければ最も成功率は高いが、その処置が不成功に終って、再び処置を必要とする場合は、根本的に処置法を改めないかぎり成功しない。

ここで行った処置は、過去二回も行ったという悪条件があったが、むしろここで示されていた事実を冷静に分析し、その上に立って保存処置を試みたのである。

限られた日数であったため、処置部分を限定し、主要と思われた絵の部分を重点的に処置したが、黄土地部分は、大部分未処置部分として手付かずとなった。絵の部分も見残しや不完全処置がないとは云えない。



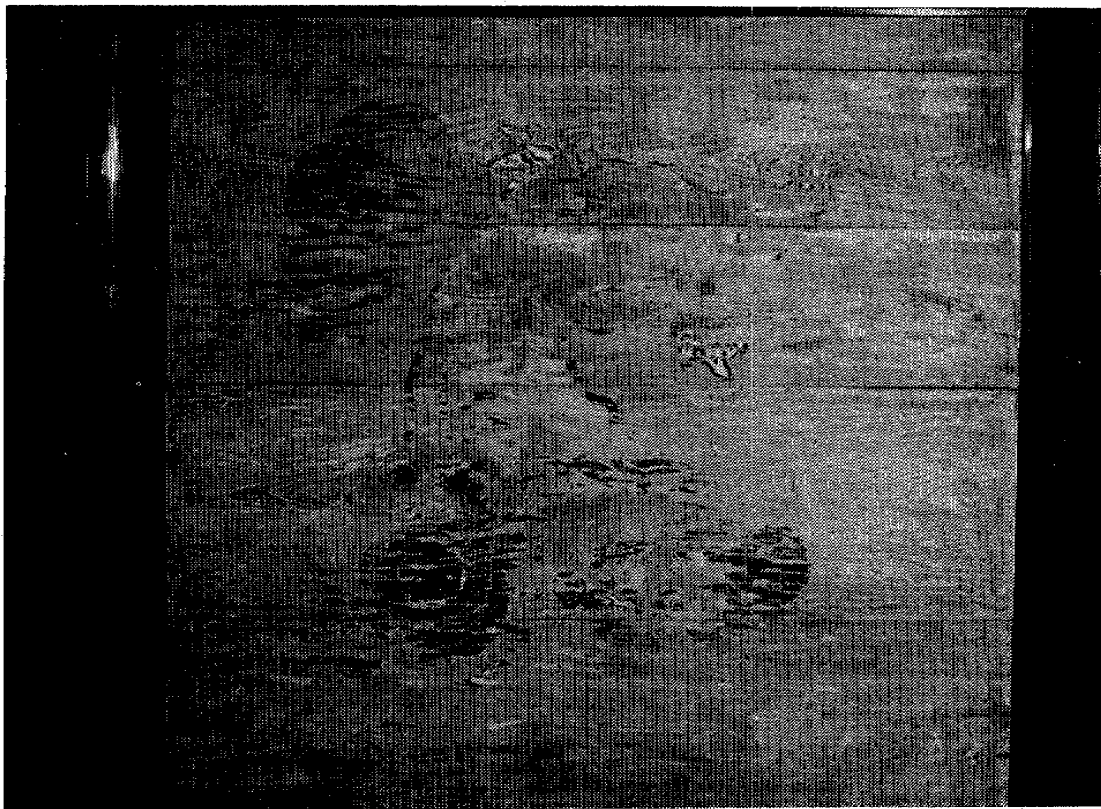
図—2



図—3



图—4



图—5





図—6



図—7

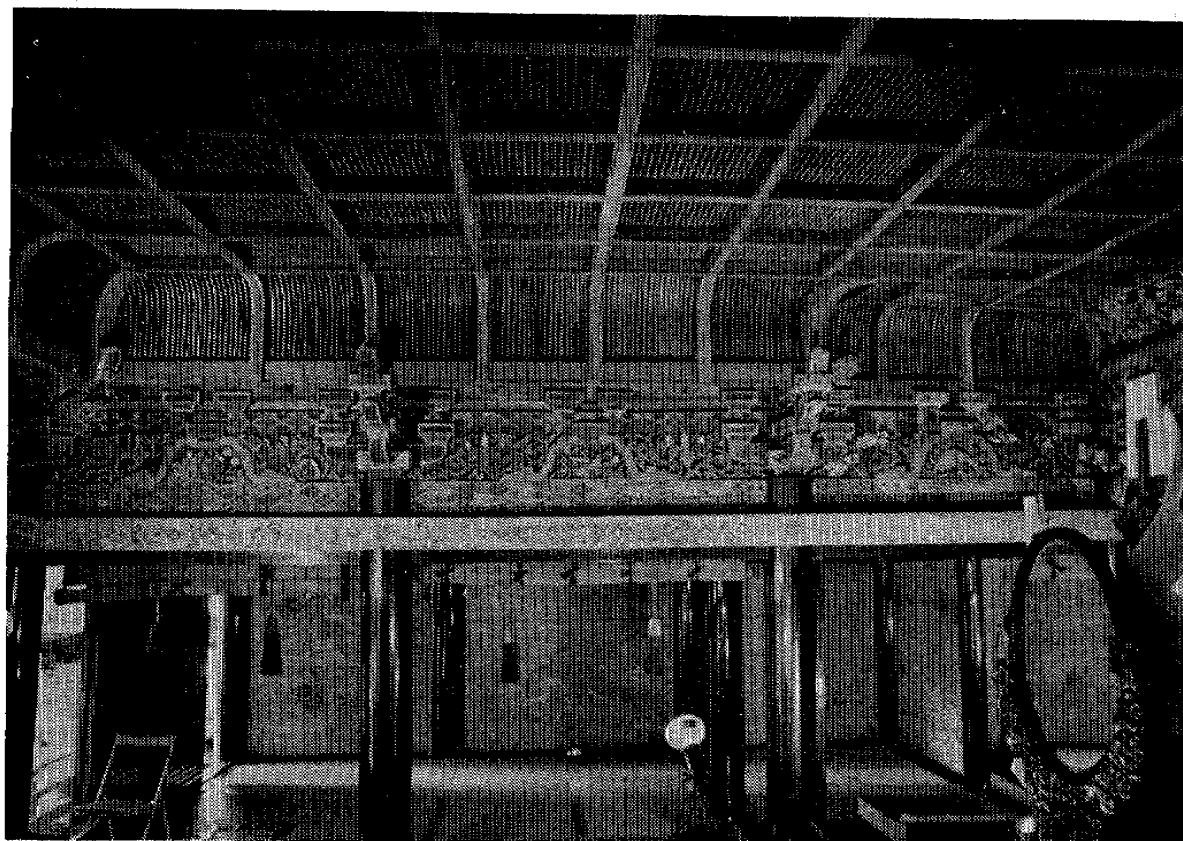


图-8

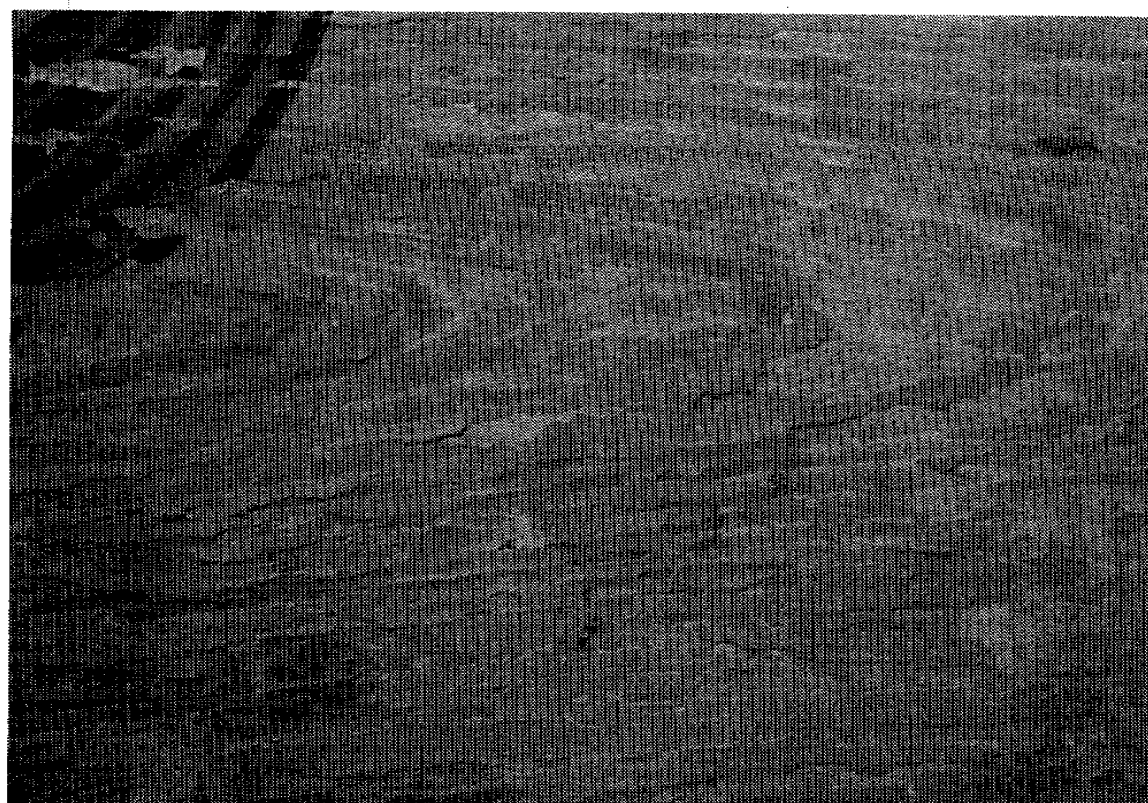
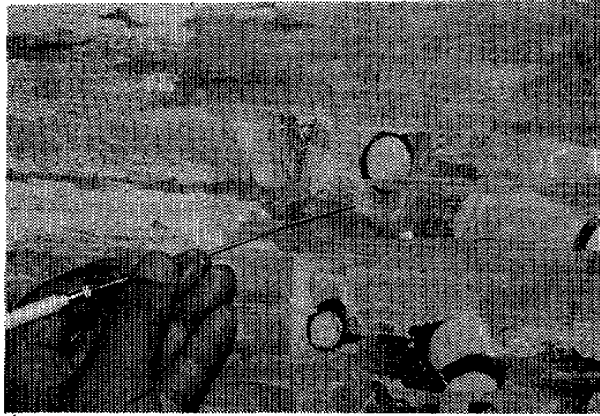
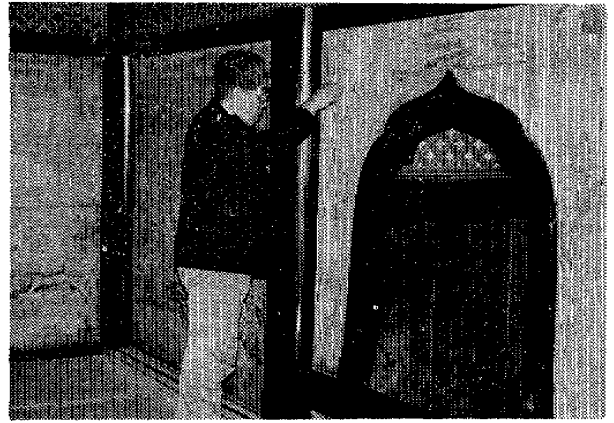


图-9





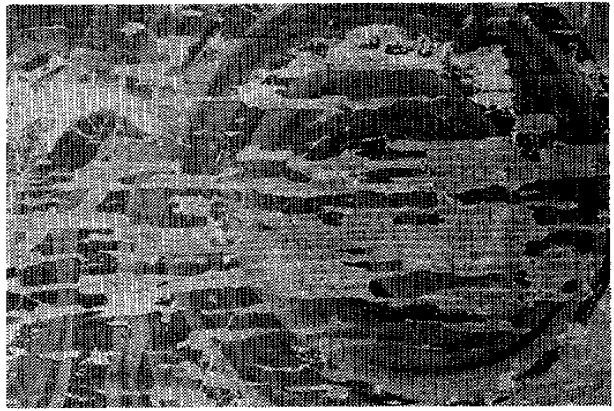
図一10 長針注射器による処置



図一11 処置図



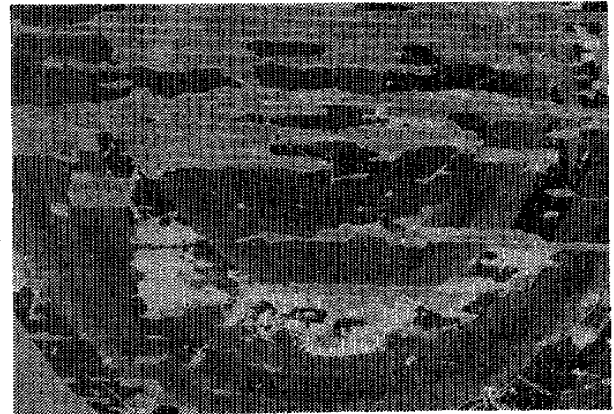
図一12 昭和42年（処置前）



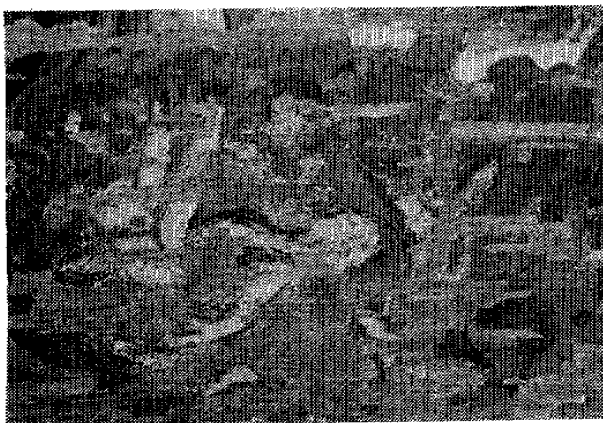
図一15 昭和53年（処置前）



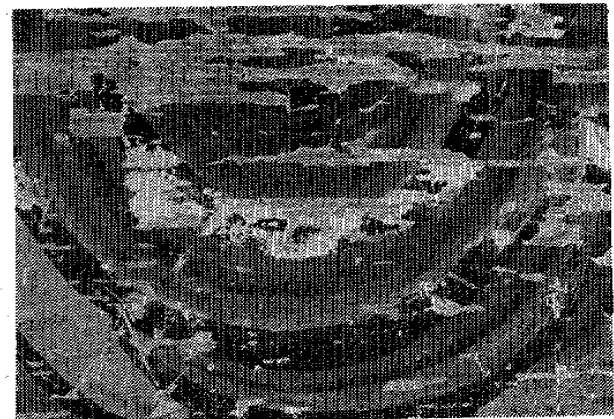
図一13 昭和53年（処置前）



図一16 昭和42年（処置前）



図一14 昭和53年（処置後）



図一17 昭和53年（処置後）

今回行った施工理論による処置が成功した場合は、この方法によって、積極的に保存処置を進展させる必要があるだろう。

なお、この受託研究は樋口清治、中里寿克、茂木曙が3回にわたる出張中に調査及び処置を行った結果を筆者らがまとめたものである。

稿の終りに、この処置の期間中、何かとお世話をいただいた大崎八幡神社宮司・小野目雅一氏に感謝致します。

#### 参 考 文 献

国 宝「大崎八幡神社社殿修理工事報告書」(昭和43年)

国 宝「北野天満宮本殿漆地彩絵の保存」保存科学 16号(昭和26年)

「輪王寺葦板絵著色神像の技法と彩色保存処置」保存科学 7号(昭和46年)

## Conservation Treatment of the Painting on Wooden Walls in the Oratory of Osakihachiman Shrine

Seiji HIGUCHI and Toshikatsu NAKASATO

Osakihachima shrine registered as a national treasure was built in about 1610 by Date Masamune. All members of the building are lacquered by Urushi and painted with colours.

The oratory interior except pillars is painted entirely with colours. Especially, ten wooden wall made of zelkova boards are painted with the motif of Karashishi (mystic lions) with Botan (peoney flowers).

Before the present treatment, treatments had been performed two times on colour parts to prevent further exfoliation. The first treatment was done with polyvinyl alcohol in 1956, and the second with acrylic resin emulsion in 1967. However, the expected results were not obtained in both cases.

The third treatment under discussion was done on the same walls with another time scaling of colour layer after about ten years aging. The authors tried to apply the non-fluid thixotropic acrylic resin emulsion by use of the syringe with 10cm long needle. By this operation, resin is introduced into the space between detached colour layer and ground.